

私の目にした原爆

広島

食べ残された水蜜桃半分

村木千鶴子

(71歳・山口県柳井市)

く兄が居たという事でした。

母が毎年、八月六日には必ず広島へ出掛けていた事。私が幼い頃からずっと、家族全員が母の体調に不安を持ち続けていた事。手許にたった一枚のこの一歳位の男の子の色あせた写真。何より印象深く記憶にあるのは、毎年八月六日には我が家の仏壇には必ず水蜜桃が供えられていた事――。

昭和二十年八月六日の午前八時十五分まで、戦時中で穏やかとは言えないまでも、朝げ、夕げを囲む親子三人の家庭があったのです。爆心地より一・二キロ、広島市二葉の里、一歳を目前にした兄との散歩に、饒津神社がありました。戦時下に身をおきながら、戦

私は、一九四六（昭和二十一年）年八月二十四日、広島に原爆が投下された翌年、誕生致しました。

幼い頃からの母の行動、様子についての疑問が解けたのは、私が高校二年生の時でした。母が緊張感をもちながら、「今から話す事はね、今後二度と

話すことはない、苦しい、辛い内容じゃけえねえ」と、納得済みであるはずの母自身を更に納得させるかのような強い口調で、私にとり鮮明に記憶にのこる話でした。

この時の話から判ったのは、私には昭和二十年八月六日の朝まで間違いな

争のない暮らしを望んだ深い願いがあった事でしょう。力無い者たちが出来得る最大の願いの神社への散歩だったと思います。

水蜜桃に戻ります。八月六日の朝、父の出勤後、兄は水蜜桃を食べ、機嫌良く一人遊び、更にこのり半分の水蜜桃を欲しがり、母は台所に立ちました。

庖丁に手をかけたその瞬間、ガラス越しに見たものは、マグネシウムを燃やすような青白い閃光、

目を開けていられない程の強い光線。同時に爆風が起き、母が腕を見ると、恐怖のあまり痛みを忘れる程の血。家の梁は落ち、ガラスは跡形もなく、この世に存在する全ての機器をつかっても、起こり得ないような破壊の現実。母は急いで、先程まで一人あそびをし、水蜜桃をねだったわが子のもとに行きました。

そこで母が目にしたものは、大きな梁の下敷になり、頭に大きなガラスの破片がささった兄の姿。

傷を負った体で兄を抱き、崩れた家から外へ出ました。どれ程の母の思いの力だった事でしょう。

どの位の距離を歩いたのか？ いつも見慣れた光景とは程遠い人、建物の姿。ここまでの破壊力とは何なのか？ 兄の重みで母も歩けなくなり、兵隊の方々に戸板にのせられると、「この

